

## アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）2014 年度教育研究報告書

<b>事業課題名</b>	非常勤講師による英語講義
<b>代表者名</b>	松田 素二
<b>事業概要</b> (600 字程度)	<p>関西学院大学国際学部教授のティモシー・ツー教授による、近代日本社会の多文化化のプロセスを在日中国人の経験を事例にして、理論的かつ実証的に考察する文化社会学・文化人類学的講義であった。ツー教授は、香港で生まれ、プリンストン大学で博士号を取得し、台湾の山地少数民族を対象に長期間のフィールドワークを行い、シンガポール国立大学で教鞭をとった経験のある、現在オーストラリア国籍の文化人類学者である。このようなアジアのグローバル化を体現しているツー教授は、自身の体験をもとに、受講学生・院生に、日本を飛び出して積極的にアジアの社会を経験し、アジアの大学で学ぶように勧めるメッセージを力強く発信していた。</p> <p>授業の内容は、明治維新で鎖国を解いた近代日本社会がアジアから大量に受容した中国人を事例にして、彼らが戦前の大日本帝国体制のもとで、どのように眼差され、どのような生活世界を構築してきたかを、歴史認識の問題にもふれながら概説した。授業の主たる力点は、グローバル化が急激に進展し、多文化化しつつある現代日本社会に焦点をあてて、日本文化との交渉のなかで「Chineseness」がいかに表象され、変容されていったかを英語で講義し、英語による討論を通じて、グローバル化するアジアにおける現代日本社会のあり方について理解を深めた。</p>
<b>成果の概要</b> (800 字程度)	<p>ツー教授は、日本、東アジア、東南アジアの社会の比較研究の分野では主導的立場にある研究であり、英語、日本語、中国語の高い能力とあいまって、受講生にグローバル化するアジア社会の比較研究の最先端を実感させ、そのなかで現代日本社会の問題点を深く考えさせることに成功した。</p> <p>現代日本社会において、増大するニューカマー外国人や外国人観光客の存在は、これまで経験したことがないレベルに達している。そのなかで外国人に対するゼノフォビックで暴力的な排斥意識も出現しつつある。こうした排斥意識によってもっともターゲットとされているのが、中国人の住民や観光客である。日本と中国・韓国とのあいだのいわゆる「歴史認識」をめぐる政治的対立を背景に、日本社会、とりわけ若者世代のあいだに「反中」感情が醸成されている。このような状況は、グローバル化するアジアにおける相互理解と交流を阻む阻害要因となっているといつてよい。</p> <p>本授業は、近代以降の日本社会のなかで「中国人」あるいは「中国性(Chineseness)」がどのように眼差され、日本文化・社会とどのような相互交渉を生成してきたのかを、文化社会学・文化人類学的に深く考察することで、上記の状況を変革しようとする試みであり、その試みは大きな成果をあげたといつてよい。授業ではまず明治以降の近代日本社会が中国とどのような関係性を構築してきたかを概観し、日本国内の「チャイナタウン」や「中華料理」などを事例に、相互交渉の過程を受講生に具体的に考えさせていった。「中華料理」を切り口にして戦後日本社会と中国文化(社会)との交渉を受講生にレポートさせフィールドトリップも経験させながら、学生の意識と関心を高めていった。こうした準備を経て、現代日本社会における「中国人の労働移動」や「観光現象」を、グローバル化と多文化化の脈絡で批判的に考察することで、受講生は現在のゼノフォビックな意識や言説に対して反撃できる視点をみにつけることができた。</p>